



教職員
特集号

2005年
3月



MAGAZINE FOR CAMPUSMATES

らしいふすてーじ

フィールドワークとデスクワーク

— 森と共に 42 年間過ごした渡り鳥 —

二村 一男

フィールド科学教育研究
センター職員



版画：ヘニマシコ（紅猿子）

旧農学部附属演習林は、北は北海道から和歌山、芦生の各演習林と白浜、上賀茂、本部、徳山の各試験地がありました。これらの森林や苗畑は、学生の実習・論文作成、教員の試験・研究のフィールドとして、また、一般市民の自然散策・レクリエーション、さらに大学の財産林としての役割も果たしている。これらのフィールドで行われる多岐にわたる教育・研究等の支援、維持管理が我々技術職員の仕事です。

これまでの 42 年間にわたるフィールドワークとデスクワークの仕事を振り返って話を綴ってみました。郷里の愛知県岡崎市のとなり町の県立安城農林高等学校林業科を昭和 38 年 3 月に卒業し、仕事場の有田川の支流、湯川川の源流の森、和歌山演習林に赴任しました。当時、職員は私を含め 8 名、公共の電話、電気も無く、飲料水は谷水を引き、夜間のみ自家発電で、午後 8 時以降は薄暗いランプ生活でした。仕事は、造林作業が中心で、私は主に

苗畑で植林用のスギ、ヒノキの苗木作りを担当しました。夢中で 3 年 3 カ月が過ぎようとした 7 月、待望の電気が上湯川の集落から事務所まで引かれました。これでランプ生活ともお別れかと思うとなんと嬉しかったことか。しかし、それもつかの間、8 月から芦生へ転勤命令、やむなく第二の古里を後に、今度は由良川の源流芦生の森へ、ここは職員の中に若者も多く、仕事も研究補助、企画、造林と変化に富んだ仕事でした。5 年あまりがすぎ結婚して、翌年に山口県の徳山試験地へ、この時初めて森林を任されたのです。試行錯誤もありましたが充実した 6 年あまりでした。そして初めて京都でのデスクワークが始まりました。まさに「渡り鳥」である。このあたりから詳しい話は省きますが、再び渡り鳥は北上、津軽海峡を渡り北海道の標茶へ、さすがに北国の冬は厳しいものでしたが、動物、植物、風景の四季折々の移ろいはすばらしく、仕事も新鮮でした。3 年で京都に南下、

京都でのデスクワーク、2 度目の芦生の森へ、4 年で京都へ 2 度目の北国へ、3 年で京都へ、渡りを重ねるうち白浜は返還になり、平成 15 年度から改組で森・里・海の連環学がスタート、名称もフィールド科学教育研究センターになり、親しんだ演習林名も研究林に改められ、最後の渡りで 3 度目の芦生へ、半年で京都へ。この時点で渡り鳥は留鳥になりました。振り返ってみるとフィールドとデスクワーク半々ほどでした。和歌山で苗木を育て植林したスギやヒノキの森林は、40 数年の樹齢になり現在では、間伐木としてわずかながら収入源になるまでに成林しました。20 年あまり過ごした森での生活は多彩であり、趣味の鳥や植物、動物の観察・写真などが楽しめ、多くの自然大好き人間の友人達に巡り会えたことは財産になりました。

大学を離れた後もフィールド研のサポーターとして、私の得意分野がお役に立てば幸いです。そして現在続けている、NPO 自然観察指導員京都連絡会と日本赤十字レスキューチェーン京都宇治支会のボランティア活動が少しでも社会貢献ができれば嬉しく思います。最後に、渡り鳥に付き合ってくれた妻に感謝したいと思います。

表紙の写真説明

芦生研究林は京都府北部由良川源流部にあるブナ、ミズナラ、アシウスギ等が混じる 4200 ヘクタールの森林（写真左下）です。ここにはツキノワグマや特別天然記念物のニホンカモシカ（写真右下）、ニホンジカ、クマタカ等が生息し、全国的にも野生生物・植物の豊富な森林として知られています。（写真左上）は林道に近い谷筋にある胸高直径 3.2m、樹高 37.5m のカツラで京都府巨樹の第 3 位に選ばれている保存木です。（二村）